

## 国際文化研究科

## I 2020年度大学評価委員会の評価結果への対応

## 【2020年度大学評価結果総評】(参考)

国際文化研究科では、2019年度は「教育課程・学習成果の評価」で多くの改善が見られた。修士課程と博士後期課程のどちらにおいても、コースワークとリサーチワークを適切に組み合わせて教育を行う施策が実施されており、高く評価できる。大半の教員が3つの教学組織に所属している中で、研究発表会やオープンセミナーを実施しており、研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化のための方策として評価できる。また、後シラバスに基づいた議論の実施は、研究科独自のFD活動として優れた取り組みである。

2019年度目標は9項目中6項目を達成し、中期目標に向けた改善策も示されている。2020年度目標は概ね適切に設定されているが、新型コロナウイルス感染症の拡大という事態を受けて、より具体的な対応策の検討が望まれる。

2019年度目標は9項目中6項目を達成し、中期目標に向けた改善策も示されている。2020年度目標は概ね適切に設定されているが、新型コロナウイルス感染症の拡大という事態を受けて、より具体的な対応策の検討が望まれる。

今後も、研究科のブランディング強化を継続し、研究科の特色を発信する取り組みによって、より多くの入学者を惹きつける研究科に発展することが期待される。また、事務作業の軽減や効率化を継続的にを行い、研究やFD活動のさらなる活発化を期待したい。

## 【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

- ・新型コロナウイルス感染症の影響下において、研究発表会やオープンセミナーは、全てオンラインに切り替えての実施となった。初めての実施形態であったが、幸い、特段のトラブルなく終了した。
- ・後シラバスについては、研究科教授会において、将来のカリキュラム改革等に活用すべく、議論を継続させている。
- ・ブランディング強化、研究科の特色の発信については、新型コロナウイルス感染症の影響により、一般公開のオープンセミナーを除いては目立った取り組みができなかった。
- ・オンライン化によって、事務作業の軽減や効率化についてはかなりの前進が見られた。

## 【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

国際文化研究科では、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、授業・研究発表会・オープンセミナーをオンラインに切り替え、柔軟に対応した点は評価に値する。国際文化研究科のブランディング強化と特色の発信については、新型コロナウイルス感染症の影響により、積極的な取り組みが出来なかったことはやむを得ないが、教員の研究発表の場として一般公開のFICオープンセミナーを2020年5月、2021年3月にリアルタイム・オンラインで2回実施できたことは、教員の教育・研究能力の向上及び社会貢献活動に繋がり、高く評価できる。

また、同研究科独自のFD活動でもある後シラバスの教授会での共有・議論は、将来のカリキュラム改革等に役立つ優れた取り組みと評価できる。大半の教員が学部、大学院、学部以外の教学組織の3つの教学組織に所属しリソースが限られている中、新型コロナウイルス感染症の影響によるオンライン化作業によって、事務作業の軽減や効率化に関連し、一定の前進が見られたことは評価できる。

## II 自己点検・評価

## 1 教育課程・教育内容

## 【2021年5月時点の点検・評価】

## (1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っているか。

S  A  B

※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(以下、修士課程一年次を M1, 2 年次を M2, 博士後期課程を D と略.)

[コースワーク]

- 「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」の三つの専門科目群の複数の科目群から、修士論文の場合は 30 単位以上、リサーチペーパーの場合は 34 単位以上取得.
- 修士論文とリサーチペーパーの最終的な選択時期は予備登録時.
- M1 では研究科の 3 つの研究分野の基本文献や研究方法を学ぶ「国際文化研究 A/B」を, M2 では修士論文やリサーチペーパー執筆準備の「国際文化共同研究 A/B」を必ず受講.

[リサーチワーク]

- 修士論文提出年度履修の「修士論文演習 A/B」で主指導教員による論文指導を受け, 同時に副指導教員から随時コメントや助言を受けることが可能.

[コースワーク, リサーチワーク共通]

- 全専任教員が参加する 7 月と 11 月に開催される論文発表会においてコメントや助言を受ける体制あり.

**【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- 特になし.

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- 修士論文審査規程
- リサーチペーパー審査規程
- 大学院履修案内
- 大学院講義概要 (シラバス)

②博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。 はい  いいえ

**【根拠資料】** ※「はい」を選択した場合に単位化及び修了要件として設定されていることが確認できる資料を記入。

- 大学院履修案内
- 大学院講義概要 (シラバス)

③博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。 S  A  B

※コースワーク、リサーチワークを組み合わせさせた教育課程の概要を記入。

- 全教員出席による入試の可否判定実施。入学後の教育における留意点の共有.
- 「博士ワークショップ」において、博士後期課程生が研究者となった際、後進の指導・教育のトレーニングとして機能するようにさせている。内容は下記の通り。
  - M2 の必修科目「国際文化共同研究 A/B」にて、学生に修士課程学生の研究発表に対するコメンテーター役を務めさせ、さらにコメントについて文書にてフィードバックを実施させる.
- 「博士ワークショップ」で具体的に調査研究を行っていくための計画書として論文プロポーザルを書き上げることにより、構想発表会と中間発表会にて発表することで、研究計画や研究成果を自ら発表するスキルの修得が可能.
- 懸念点等がある場合は、必修科目の担当教員が教授会に報告し共有.
- 年 2 回実施の発表会にて、学生の研究発表に対する質疑やコメントの実施。同発表会には全教員が出席し、発表会終了後の教員による評価会議にて、個々の学生の発表への質疑や意見を出し合い、それをふまえて主指導教員・副指導教員がその後の指導方針を他の教員と共有.

**【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- 特になし.

**【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。

- 国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン

④専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。 S  A  B

※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

<p><b>【修士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」の三領域の専門科目をほぼ均等に配置し、それぞれの科目を専門とする教員が担当することで、学生の側から見ると1つ1つの科目の専門知識だけでなく、それらをつなぐ学際的な思考の涵養が可能。</li> </ul>	
<p><b>【博士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「博士ワークショップ」の研究発表において、三領域の専門科目を担当する教員より、各教員の専門的知見からのコメントや助言を受けることが可能。</li> <li>「博士論文演習」において、Dにおける研究を進めるために必要な教育を提供。</li> <li>2名の副指導教員から必要に応じて随時指導や助言を受けられる体制。</li> </ul>	
<p><b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>特になし。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ナンバリング一覧</li> <li>国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン</li> <li>国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン</li> </ul>	
<p>⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※大学院教育のグローバル化推進のためにしている取り組みの概要を記入。</p>	
<p><b>【修士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>アカデミックな英語力養成のために「Thesis Writing A/B」と「Oral Presentation」を設置。</li> <li>アカデミックな日本語力養成のために下記の科目を設置。 <ul style="list-style-type: none"> <li>M1 留学生を対象とする「国際文化研究日本語論文演習 A/B」。</li> <li>M2 留学生を対象とする「国際文化研究日本語論文演習 C」。</li> </ul> </li> </ul>	
<p><b>【博士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>海外での実地視察調査や学会発表、外国語での論文執筆の推奨・指導。</li> </ul>	
<p><b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>特になし。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>新入生オリエンテーション資料</li> <li>大学院講義概要（シラバス）</li> </ul>	
<p>1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。</p>	
<p>①学生の履修指導を適切に行っていますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> S A B</p>
<p>※履修指導の体制及び方法を記入。</p>	
<p><b>【修士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>新入生オリエンテーションにて、研究科長が履修指導を事前作成録画により実施。</li> <li>「教員紹介冊子」に基づき、教員が担当科目や指導可能領域を説明。</li> <li>留学生に対して、「国際文化研究日本語論文演習 A/B/C」、アカデミックな英語力を養成する科目として「Thesis Writing A/B」と「Oral Presentation」の履修を勧奨。</li> <li>初回授業で履修予定者の関心を確認。「学習支援システム」等により履修指導を各科目にて実施。</li> <li>研究科の自主的な研究会「ひころく」の活動の一環として、新入生オリエンテーションに、上級生による自らの研究内容の説明（冊子配布による）。履修等に関する助言を得ることが可能。</li> <li>必修授業の場での担当教員による助言。オンラインでの実施による。</li> <li>主指導教員（ならびに副指導教員）による履修指導。主としてオンラインでの実施による。</li> </ul>	
<p><b>【博士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>新入生オリエンテーションにおいて、コースワークやリサーチワークに関する履修指導実施。</li> </ul>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 初回授業にて履修予定者の関心の確認。それに基づく履修指導の実施。</li> <li>・ 研究科の自主的な研究会である「ひころく」の場で上級生が履修等に関する助言。</li> <li>・ 主指導教員（ならびに副指導教員）による履修指導。主としてオンラインでの実施による。</li> </ul>	
<p><b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 多くの履修指導について、従来の対面方式からオンライン動画による配信形式に変更して実施。</li> <li>・ 授業実施を始め多くの部分がオンラインとなり、従来以上の措置が必要となったことに伴い、執行部でこまめに学習状況に対応し、メール等で相談等を受理。必要な場合には学生とオンライン面談等を行って対処。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新入生オリエンテーション資料</li> <li>・ 教員紹介冊子</li> </ul>	
<p>②研究科（専攻）として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。</p>	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>※ここでいう「研究指導計画」とは、事務手続きのスケジュールやシラバス等の個別教員の指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導体制及び研究指導スケジュールをまとめたものを指します（学位取得までのロードマップの明示等）。また、「あらかじめ学生が知ることの状態」とは、HPや要項への掲載、ガイダンスでの配布等が考えられます。</p> <p><b>【修士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン」を新入生オリエンテーション（本年度は代替周知法としてHPでの公開で対処）で配布し、研究指導計画を説明。</li> <li>・ 同ガイドラインを研究科HPで公開。必要に応じて新入生オリエンテーションの動画の視聴が可能。</li> </ul> <p><b>【博士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン」を新入生オリエンテーション（本年度は代替周知法としてHPでの公開で対処）で配布し、研究指導計画を説明。</li> <li>・ 同ガイドラインを研究科HPで公開。必要に応じて新入生オリエンテーションの動画の視聴が可能。</li> </ul> <p><b>【根拠資料】</b> ※研究指導計画が掲載された文書・冊子等の名称を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン」  <a href="https://www.hosei.ac.jp/application/files/7415/7439/2416/2019_2_kokusaibunka_gakui-kenkyu_shusi.pdf">https://www.hosei.ac.jp/application/files/7415/7439/2416/2019_2_kokusaibunka_gakui-kenkyu_shusi.pdf</a></li> <li>・ 「国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン」  <a href="https://www.hosei.ac.jp/application/files/5015/7439/2445/2019_2_kokusaibunka_gakui-kenkyu_hakase.pdf">https://www.hosei.ac.jp/application/files/5015/7439/2445/2019_2_kokusaibunka_gakui-kenkyu_hakase.pdf</a></li> </ul>	
<p>③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。</p>	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。</p> <p><b>【修士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全教員出席による入試の合否判定実施。入学後の教育における留意点の共有。</li> <li>・ M1 必修科目「国際文化研究 A/B」において、国際文化研究に関する修士論文・リサーチペーパーを書いていくための土台としてのリサーチ・デザインや研究の方法論を、専任教員と本研究科で博士課程を修了した兼任教員がペアになって指導。</li> <li>・ M2 必修科目「国際文化共同研究 A/B」において、各学生が研究の進捗状況や調査結果を発表し、専任教員ならびに本研究科で博士課程を修了した兼任教員がコメントや助言を提供。「博士ワークショップ」履修中の博士課程の学生による、発表に対してのコメントの提供や、文書によるコメント等のフィードバックの実施。</li> <li>・ 懸念点等がある場合は、必修科目の担当教員が研究の進捗状況等について、教授会に報告し情報共有。</li> <li>・ 年 2 回実施の発表会にて、学生の研究発表に対する質疑やコメントの実施。同発表会には全教員が出席し、発表会終了後の教員による評価会議にて、個々の学生の発表への質疑や意見を出し合い、それをふまえて主指導教員・副指導教員がその後の指導方針を他の教員と共有。</li> </ul> <p><b>【博士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全教員出席による入試の合否判定実施。入学後の教育における留意点の共有。</li> </ul> <p>[2019年度以前の入学生]</p>	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> <li>全教員が出席する7月の構想発表会もしくは11月の中間発表会での研究発表。その場で教員による研究発表に対する質疑やコメントをフィードバック。発表会終了後の教員による評価会議にて、個々の学生の発表への質疑や意見を出し合い、それをふまえて主指導教員・副指導教員がその後の指導方針を他の教員と共有。</li> </ul> <p>[2019年度以降の入学生]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>主指導教員・副指導教員が、「博士ワークショップ」の三つのステップごとの研究課題に関して指導。</li> <li>全教員が出席する7月の構想発表会もしくは11月の中間発表会での研究発表。その場で教員による研究発表に対する質疑やコメントをフィードバック。発表会終了後の教員による評価会議にて、個々の学生の発表への質疑や意見を出し合い、それをふまえて主指導教員・副指導教員がその後の指導方針を他の教員と共有。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>後シラバス（学期終了後、各教員が担当授業に関して、曜日・時限・受講者数）「授業概要」「成果・達成度など」「設置科目の研究科全体での位置づけなどについての問題点・今後の課題などへのご意見」の項目を記入し提出したものの。その内容は研究科教授会の審議事項。）</li> </ul>	
<p>④通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果について教えてください。</p>	
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大学の授業実施の決定に従い、研究科教授会で授業実施について議論し、決定。</li> <li>オンラインでの授業実施については、研究科長会議での教育開発支援機構教育開発・学習支援センターの報告を、研究科長会議報告としてメールにて伝え、さらに Desknet's に掲載し、情報を共有。当初は対面を望む声が多く、今でも全く不満がないわけではないが、段々と学生も慣れ、対面授業に近いレベルの教育が実現できている。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2020年度第4, 7回教授会資料, 同議事録</li> <li>2020年度第2, 5, 6, 7回研究科長会議資料</li> <li>200917_研究科長会議_05 報告, 201001_研究科長会議_06 報告, 201119_研究科長会議_07 報告 (Desknet's に掲載の報告文書)</li> </ul>	
<p>1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。</p>	
<p>①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※成績評価と単位認定の確認体制及び方法を記入。</p> <p><b>【修士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>成績評価や単位認定に対して学生から問題が指摘された場合は教務委員会で対応。</li> <li>修士論文およびリサーチペーパーの合否判定と評価に関しては、主査と副査による評価が適切かどうか専任教員全員で検討。</li> </ul> <p><b>【博士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>成績評価や単位認定に対して学生から問題が指摘された場合は教務委員会で対応。</li> <li>博士論文の合否判定は、公開発表会および審査小委員会の結果を基に、教授会（審査委員会）で審議の上承認。</li> </ul> <p><b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>特になし。</li> </ul> <p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>各学位論文の審査規程</li> </ul>	
<p>②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ</p>
<p>※学位論文審査基準の名称及び明示方法を記入。</p> <p><b>【修士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学位論文審査基準の名称：「国際文化研究科修士論文規程」・「同リサーチペーパー規程」</li> <li>明示方法：「国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン」による。</li> </ul>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<b>【博士】</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>学位論文審査基準の名称：「国際文化研究科博士論文規程」</li> <li>明示方法：「国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン」による</li> </ul>	
<b>【根拠資料】</b> ※学位論文審査基準にあたる文書の名称を記入。また、冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>各学位論文の審査規程</li> <li>国際文化研究科修士学位取得のためのガイドライン</li> <li>国際文化研究科博士学位取得のためのガイドライン</li> </ul>	
③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。	はい <input checked="" type="checkbox"/> いいえ
※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>研究科執行部が大学院課よりこれまでの学位授与者のデータを入手し把握。</li> </ul>	
<b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>特になし。</li> </ul>	
④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組みの概要を記入。	
<b>【修士】</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>構想発表会および中間発表会での発表ならびに口述試験を研究科の全専任教員が出席する場で実施。</li> <li>それぞれの発表会や試験終了後に全教員で評価会議を行い、情報を共有。</li> </ul>	
<b>【博士】</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>構想発表会および中間発表会での発表を研究科の全専任教員が出席する場で実施。</li> <li>発表会後に全教員で評価会議を行い、情報を共有。</li> </ul>	
<b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>2019年度入学者よりDに導入された3段階のステップ制により、「博士ワークショップIB」の単位認定を初めて実施。レベルに従い設定された研究課題について主指導教員・副指導教員が達成度をチェックし、この研究課題に関する発表を研究科全専任教員で評価。</li> </ul>	
<b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>2020年度1月臨時研究科教授会議事メモ</li> </ul>	
⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※責任体制及び手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行われている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入。	
<b>【修士】</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>修士論文ならびにリサーチペーパーの口述試験（論文提出者による主旨説明10分、主査からの試問15分、副査からの試問10分、その他の教員からの試問10分）後に、研究科の専任教員で判定会議を開催し、審査規程に照らして学修の成果を判断。</li> </ul>	
<b>【博士】</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>学位規則の通り。</li> </ul>	
<b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>特になし。口述試験はZoomによるオンラインにて実施。</li> </ul>	
<b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>特になし。</li> </ul>	
⑥学生の就職・進学状況を研究科（専攻）単位で把握していますか。	はい <input checked="" type="checkbox"/> いいえ
※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。	
<ul style="list-style-type: none"> <li>従来、研究科教授会資料としてキャリアセンターよりデータを入手し、提示してきたが、2020年度は未報告。</li> </ul>	
<b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・ 特になし。	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組みの概要を記入。	
<p><b>【修士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>研究科の三つの研究領域（「国際社会に存在する多様な地域文化間の相関関係」「多文化・多民族社会での共生」「様々なメディアが介在する情報化社会における文化交流・認識」）の基盤的な知識と方法論の修得については、M1の必修科目「国際文化研究 A/B」ならびに M2の必修科目「国際文化共同研究 A/B」にて、各学生の成果を把握・評価。</li> <li>質的・量的調査による一次資料の発掘、その分析結果を口頭表現や文章表現、あるいは ICT 等を活用して論理的に伝えることができる能力に関しては、全ての専任教員が参加する構想発表会ならびに中間発表会にて、適宜学習成果を把握・評価。</li> <li>異文化間の課題について既存文献や先行事例を体系的に理解した上で批判的に評価する能力、ならびに異文化間の理解や交流に関わる研究の知を現実の問題発見や実務的な問題解決に結びつけて実践知とする能力の修得に関しては、全ての専任教員が参加する構想発表会ならびに中間発表会にて、異なる学問分野の知見から学際的に学習成果を把握・評価。</li> </ul> <p>上記に加え、修士論文やリサーチペーパーの口述試験後、研究科の全専任教員出席の判定会議を開催し、審査規程に照らして学修の成果を判断し情報を共有。</p>	
<p><b>【博士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>研究科の三つの研究領域である「異文化相関関係研究」「多文化共生研究」「多文化情報空間研究」の専門性を高めるため、博士論文演習に加え、研究科所属の全教員が参加しての「博士ワークショップ」を配置し、異なる領域からの学びを深化。</li> <li>外国語文献を批判的に評価し、研究成果を単著として発表できるよう「博士論文演習」を通して指導。さらに、国内外の学術誌への投稿や海外での研究発表を強く奨励。</li> <li>将来研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングの場として「博士ワークショップ」において、修士課程の学生の研究に対するコメントを課し、さらに大学院所属の留学生に対するチューターを奨励。</li> <li>上記に加え、論文提出年次に、主旨導教員と副指導教員が審査規程に沿って学習成果を評価。その結果を教授会で審議の上、情報共有。</li> </ul>	
<b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	
・ 特になし。	
<b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。	
・ 特になし。	
②具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ループリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。	
<p><b>【修士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>M1必修科目「国際文化研究 A/B」ならびに M2必修科目「国際文化共同研究 A/B」において、研究科の三つの領域に関する知識と方法論の修得。</li> <li>調査方法や論文技法を含めた学習成果について、担当教員が把握・評価。</li> <li>構想発表会・中間発表会、口述試験の全てが全教員参加で実施。異なる学問分野から学際的に学習成果を把握・評価。</li> </ul>	
<p><b>【博士】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>論文構想発表会ならびに中間発表会に全教員が参加し、異なる学問分野から学際的に学習成果を把握。</li> </ul>	
<b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> <li>2019年度入学者よりDに導入された3段階のステップ制により、「博士ワークショップIB」の単位認定を初めて実施。レベルに従い設定された研究課題について主指導教員・副指導教員が達成度をチェックし、この研究課題に関する発表を研究科全専任教員で評価。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2020年度1月臨時研究科教授会議事メモ</li> </ul>	
<p>1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。</p>	
<p>①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。</p>	<input checked="" type="checkbox"/> S    A    B
<p>※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <p><b>【修士】</b></p> <p>[コースワーク]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学期ごとに後シラバスを教務委員会で検討し、その結果を教授会で議論。</li> </ul> <p>[リサーチワーク]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>時期を定めて構想発表会・中間発表会・国際文化情報学会を開催することで、研究科全体として研究の進捗を確認。次年度の科目の設定や必修科目の見直し等の参考とする。</li> </ul>	
<p><b>【博士】</b></p> <p>[コースワーク]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「博士ワークショップ」における成果を、担当教員ならびに執行部で共有。研究科教授会にて審議し情報共有を行う。</li> </ul> <p>[リサーチワーク]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>時期を定めて構想発表会・中間発表会・国際文化情報学会を開催することで、研究科全体として研究の進捗を確認。次年度の科目の設定や必修科目の見直し等の参考とする。</li> </ul>	
<p><b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>M, D共通の新規事項として、法政国際文化倫理委員会を新たに設立。職務は以下の通り。             <ul style="list-style-type: none"> <li>教員および学生から提出された研究計画書を法政大学「人を対象とする研究倫理」規程、「法政大学研究倫理規程」,「研究科研究倫理ガイドライン」(法政国際文化研究倫理委員会作成)に則り審査。審査依頼・審査結果の研究科教授会での報告。</li> <li>研究倫理に関して問題提起があり、解決策、提案などが求められた際、議論し、必要に応じて教授会に審議を依頼。</li> </ul> </li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2020年度第2回教授会資料, 第7回教授会資料(教務委員会の後シラバスへのコメント)</li> <li>法政国際文化倫理委員会の設立については, 第4回研究科教授会資料, 同議事録。</li> </ul>	
<p>②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。</p>	S <input checked="" type="checkbox"/> A    B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2020年度は春学期授業改善アンケートの実施は見合わせとなったが、オンライン授業に関する学生対象調査の集計結果について、研究科長会議の資料をメールで報告し、併せてDesknet'sにて情報共有。</li> <li>必修科目の「国際文化研究A/B」、「国際文化共同研究A/B」において、担当する専任教員が学生の声を聞き、それを授業の改善に活用。</li> </ul>	
<p><b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>例年とは異なり、メール・Desknet'sを活用したことの他は特になし。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2021年度第2, 5, 6, 7回研究科長会議資料</li> </ul>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。



- 200917\_研究科長会議\_05 報告, 201001\_研究科長会議\_06 報告, 201119\_研究科長会議\_07 報告 (Desknet's に収載の報告文書)

## (2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
〔修士〕	
<ul style="list-style-type: none"> <li>M1 必修科目「国際文化研究 A/B」の履修により、カリキュラム・ポリシーならびにディプロマ・ポリシーに掲げられている三つの研究領域に関する基盤的な知識や方法が修得できるようになっている点</li> </ul>	1.1①, ③ ; 1.2③ ; 1.4①, ②
<ul style="list-style-type: none"> <li>全教員参加の発表会（春学期の構想発表会ならびに秋学期の中間発表会。さらに M1 では国際文化情報学会）を軸にして、学生の研究に関する進捗状況を把握するとともに、異なる研究分野の教員がアドバイスをを行い、学際的な研究に発展させていけるようになっている点。</li> </ul>	1.5②  1.1①, ③ ; 1.2③, ; 1.3④ ; 1.4①, ② ; 1.5①
<ul style="list-style-type: none"> <li>全教員参加の口述試験により、異なる研究分野の視点から、多角的かつ学際的な評価が可能である点。</li> </ul>	1.3④, ⑤ ; 1.4①, ②
〔博士〕	
<ul style="list-style-type: none"> <li>D1 から D3 に毎年「博士ワークショップ」を配置し、博士論文の作成に向けたリサーチワークを進めていくだけでなく、将来教育者となるための能力を育成できるようになっている点。</li> </ul>	1.1③, ④ ; 1.2③ ; 1.4①, ③ ; 1.5①  1.1①, ③ ; 1.2③, ; 1.3④ ; 1.4①, ② ; 1.5①
<ul style="list-style-type: none"> <li>全教員参加の発表会（春学期の構想発表会ならびに秋学期の中間発表会。さらに M1 では国際文化情報学会）を軸にして、学生の研究に関する進捗状況を把握するとともに、異なる研究分野の教員がアドバイスをを行い、学際的な研究に発展させていけるようになっている点。</li> </ul>	1.1③, ④ ; 1.2③ ; 1.4①, ③ ; 1.5
<ul style="list-style-type: none"> <li>2019 年度以降の入学生は「博士ワークショップ」の履修により、段階的に博士論文の作成に向けたリサーチワークを進めることが可能になっている点。</li> </ul>	

## (3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> <li>学生の就職・進学状況を研究科（専攻）単位で把握していなかった点。大学院課にデータを依頼していたが、キャリアセンターから入手して報告すべきであった。2021 年度は同センターからデータを入手し、報告したい。</li> </ul>	1.3 ⑥

## 【この基準の大学評価】

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

国際文化研究科では、教育課程の編成・実施方針に基づき、修士・博士後期課程共にコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育が行われていると評価できる。修士課程では、コースワークに関連して、1年次に「国際文化研究A/B」、2年次に「国際文化共同研究A/B」の履修を義務づけており、リサーチワークに関連しては、修士論文とリサーチペーパーの審査基準と修了要件を明確にした上で学習指導を行っており、一定の評価に値する。修士論文の構想発表会および中間発表会での発表ならびに口述試験には、研究科の全専任教員が参加することによって、異なる学問分野から学際的に学習成果を把握することが可能となり、学位の水準維持につながっていると評価できる。

博士後期課程では、「博士ワークショップ」における3段階ステップ制の実施及び三領域の専門科目を担当する教員による専門的知見からのコメントや助言、修士2年次必修科目「国際文化共同研究A/B」における博士後期課程学生からのフィードバックは、順次性を持ったコースワークとリサーチワークの体系形成に役立つ、大変優れた取り組みであると評価できる。

学生の履修指導については、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、従来の対面方式からオンラインによる配信形式への変更を余儀なくされたが、執行部でこまめに学習状況に対応し、メール等で相談等を受理、必要な場合には学生とオンライン面談等を行って対処したことは評価に値する。2020年度に法政国際文化倫理委員会を新たに設立し、教員および学生から提出された研究計画書を諸倫理規定に則り審査し、審査依頼・審査結果の研究科教授会での報告を行う取り組みは、教育内容・教育方法の充実化に繋がり、高く評価できる。問題点・課題として挙げられている、研究科（専攻）単位での学生の就職・進学状況について2020年度は把握が十分でなかった点については、2021年度に改善を期待したい。

## 2 教員・教員組織

### 【2021年5月時点の点検・評価】

#### (1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①研究科（専攻）独自のFD活動は適切に行われていますか。	S A B
<p><b>【FD活動を行うための体制】</b> ※簡条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>FD委員会</li> <li>研究科執行部</li> </ul> <p><b>【2020年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】</b> ※簡条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>新入生オリエンテーションが中止となったことを受け、執行部でパワーポイント動画を作成し、YouTubeにアップロードして対応（2020年4月1日に研究科長がメールで学生に案内。内容：1. はじめに、2. 国際文化研究科の目的・教育目標、3. 修了要件について、4. 研究指導体制について、5. 大学院でのスケジュール、6. 諸注意およびその他の連絡事項、7. おわりに。オンデマンド実施で、主たる対象は新入生10名。他の大学院生も視聴可能。）</li> <li>新任教員、名誉教授、現職教員による研究発表会（5月26日と3月9日。FICオープンセミナーの形式をとった石森、中島、佐藤三氏による一般公開の研究発表会。詳細は後述。参加者は延べ30名程度）。</li> <li>研究科教授会での後シラバスに基づいた議論の実施（第2回研究科教授会、5月26日、Zoomによる開催。17名；第7回研究科教授会、11月24日、Zoomによる開催。15名。）。</li> <li>シラバス第三者確認（2021年2月11日から3月12日。オンラインでの実施。執行部とFD委員5名による第三者確認。対象：研究科全教員）。</li> </ul> <p><b>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>基盤学部との共催の一般公開のFICオープンセミナーを2回実施。以下の通り。 <ul style="list-style-type: none"> <li>石森大知「メラネシアの宗教運動論の再検討」（5月26日、Zoomにて開催。約30名）。</li> <li>中島成久「インドネシア、土地紛争研究事始め」、佐藤千登勢「ロシア・ソ連映画に刻まれた貴族屋敷（ウサーチバ）表象の一面」（3月9日、Zoomにて開催。約30名）。</li> </ul> </li> </ul> <p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>新入生オリエンテーションについて：</li> </ul>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・ 200401\_国際文化研究科へようこそ：2020 年度研究科オリエンテーションに代えて（プレゼンテーション・スライド）
- ・ web 公開新入生オリエンテーション資料.
- ・ 研究発表会について：
  - ・ プレゼンテーション・スライド，レジュメ資料等.
- ・ 後シラバスについて：
  - ・ 第 2 回，第 7 回研究科教授会資料および議事録.
- ・ シラバス第三者確認について：
  - ・ 2021 年度第 1 回研究科教授会にて報告，同議事録掲載.

②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。 S A B

- ※取り組みの概要を記入。
- ・ 基盤学部の国際文化学部とともに国際文化情報学会を構成する研究科として，学会費を使った FIC オープンセミナーを企画。大学院生にも参加を推奨.

- 【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】** ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。
- ・ 基盤学部との共催の一般公開の FIC オープンセミナーを 2 回実施。以下の通り。
    - ・ 石森大知「メラネシアの宗教運動論の再検討」（5 月 26 日，Zoom にて開催。約 30 名）.
    - ・ 中島成久「インドネシア，土地紛争研究事始め」，佐藤千登勢「ロシア・ソ連映画に刻まれた貴族屋敷（ウサーチバ）表象の一断面」（3 月 9 日，Zoom にて開催。約 30 名）.

- 【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入。
- ・ 研究発表会のスライド，レジュメ資料等.

③組織編制や F D 等に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

- ※取り組みの概要を記入
- ・ FD の種々の試みを基本的にオンラインで対応.
  - ・ 入試業務に関して，従来のやり方を見直し，書類審査とオンライン面接との二段階選抜を実施して対応.

- 【根拠資料】** ※ない場合は「特になし」と記入
- ・ FD の試みについて：
    - ・ オンライン化での対応については，教授会メーリングリストへのメール連絡
  - ・ 入試業務について：
    - ・ 第 4 回，第 8 回研究科教授会資料・議事録

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 研究科の専任教員による研究発表会を開催している点。同研究発表会には教員だけでなく大学院生も参加し，教員の FD 活動の推進ならびに研究科全体の研究活動の活性化につながる取り組み.</li> </ul>	2.1①
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 他にあまり例を見ない後シラバスという試みがある点。事後に教育内容を振り返り気づきを得るよい機会となるだけでなく，改善点を考える上でも大きなヒントを与えてくれている.</li> </ul>	2.1①

(3) 問題点・課題

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> <li>研究科の専任教員の研究やFD活動を活発化させていくのがなかなか難しい点。教員の多忙が主原因。研究科の教員は学部と兼任で、基盤学部の国際文化学部の教員は学部以外の教学組織の運営にも関わることが多い。大学院を含めると三つの教学組織に所属している教員が大半。その上、大学の情報教育、グローバル教育にも参画・推進の役割を担っている教員も多い。一つの対策としては、事務作業の軽減や効率化。2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン化が各所で進んだが、今後も一層の効率化の推進が望まれる。</li> </ul>	2.1①, ②

### 【この基準の大学評価】

国際文化研究科における、2020年度FD活動は新型コロナウイルス感染症の影響の中にあつて、総じて評価に値する。新入生オリエンテーションが中止となったことを受け、年度開始直後に執行部でパワーポイント動画を作成・配信したことは迅速且つ柔軟な対応と言える。教員による研究発表会をFICオープンセミナーの形式をとってリアルタイム・オンラインで2回実施できたことは、教員の教育・研究能力の向上と社会貢献に繋がり、高く評価できる。

また、後シラバスに基づいた議論を研究科教授会で春学期と秋学期に各1回ずつ行い、教育内容を振り返り改善点を考える機会を設けることは、研究科独自のFD活動として優れた取り組みと評価できる。シラバスの第三者確認も順調に行われた。大半の教員が研究科を含め3つの教学組織に所属していること、その上、大学の情報教育、グローバル教育にも参画・推進の役割を担っている教員も多いことから、研究科の専任教員の研究やFD活動の活発化に制約があるものの、事務作業の更なる軽減や効率化を図ることで対処していくことが期待される。

## 3 その他の基準のCOVID-19への対応

### 【2021年5月時点の点検・評価】

#### (1) 点検・評価項目における現状

3.1 その他、学生支援や学生の学習環境や教員の教育環境整備、社会貢献におけるCOVID-19対応・対策を行っているか。
①その他、研究科として学生支援や学生の学習環境や教員の教育研究の環境整備、社会貢献等におけるCOVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。
※取り組みの概要を記入
<ul style="list-style-type: none"> <li>授業実施を始め多くの部分がオンラインとなり、従来以上の措置が必要となったことに伴い、執行部でこまめに学習状況に対応し、メール等で相談等を受理。必要な場合には学生とオンライン面談等を行って対処。</li> <li>機器の老朽化から、特色ある教育研究プログラム補助により、大学院控え室のコンピュータを一新し、授業のオンライン化等に対応。</li> </ul>
【根拠資料】
<ul style="list-style-type: none"> <li>第11回研究科教授会資料</li> </ul>

### 【この基準の大学評価】

国際文化研究科では、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、授業・研究発表会・オープンセミナーをオンラインによって実施した。とりわけ、一般公開のFICオープンセミナーをリアルタイム・オンラインで2回実施できたことは、教員の教育・研究能力の向上と社会貢献活動に繋がり、高く評価できる。学生の履修指導については、執行部が学習状況を確認すると共にメール等で相談等を受理し、必要に応じて学生とオンライン面談等を行って対処したことは評価に値する。学生の学習環境については、特色ある教育研究プログラム補助により、老朽化した大学院控え室のコンピュ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

ータを一新し、授業のオンライン化等に対応したことも評価できる。

### III 2020 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的	
1	中期目標	研究科の教育目標に掲げられている、マルチカルチュラルな人材育成とインターカルチュラルに活躍する高度職業人及び研究者の養成について、具体的な像ならびに養成の方法に関する議論を行う。	
	年度目標	研究科教授会などで、ことあるごとに議論を重ね、どのような人物を理想とするか、どのようにすればそのような人物が養成できるか、意見を交換し、情報を共有する。	
	達成指標	教員各自が、マルチカルチュラルな人材、インターカルチュラルに活躍する高度職業人や研究者とは具体的にどのような人物なのか実例を挙げ、教員紹介冊子で、その人物を選んだ理由とともに学生や教員と情報共有し、併せて年度末を目途に web 上で公開する。（場合によっては、別途冊子の作成も視野に入れる）	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	B
		理由	教員紹介冊子で、マルチカルチュラルな人材、インターカルチュラルに活躍する高度職業人や研究者について実例を挙げ、情報共有を図ったが、あくまで情報共有に留まってしまい、意見交換までには至らなかったため。発表会や修了口述試験等で、間接的にそのようなことをうかがい知るのがやっとであったため。
		改善策	研究科内でのコミュニケーションを図ることを第一の改善策として挙げたい。具体的には、教員のみではなく、学生にも呼びかけてコミュニケーションを図ることで、少しでもこの点で前進を図りたい。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	本研究科が目指すマルチカルチュラルな人材、インターカルチュラルに活躍する高度職業人及び研究者の具体的な人物像を提示できたことは一歩前進である。
		改善のための提言	研究科の各種入試経路の志願者のニーズおよび修了者の進路も踏まえた、より適切な人物像の提示。
No	評価基準	内部質保証	
2	中期目標	教員の教育能力の向上の取り組みの一環として、教員の研究活動の促進を図る。	
	年度目標	基盤学部と共に実施する国際文化情報学会の行事である FIC オープンセミナーというかたちで、研究科所属の専任教員の研究発表会を複数回開催する。	
	達成指標	FIC オープンセミナーを最低 2 回開催する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	FIC オープンセミナーを 2 回実施できたことで、当初の年度目標は一応達成することはできたが、質の向上が顕著である、とまでは考えられないため。
		改善策	FIC オープンセミナー開催に向けた事前の準備をもっと徹底して行っていきたい。そのため、学部とも事前に打ち合わせ等をしっかり行い、円滑に行事を進めることを徹底したい。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	2018 年度から始まった教員の研究発表会は、FIC オープンセミナーとして定着している。
		改善のための提言	教員、学生への一層の参加呼びかけや、教育能力（深い内容を平易に伝える力）の向上に繋げる工夫を（発表に対する参加者のリアクションペーパーなど）。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
3	中期目標	学生のニーズに即した学部・大学院の相互連携を、基盤学部である国際文化学部と協力しながら推進する。	
	年度目標	可能な相互連携について、2019年度に国際文化研究科における修士1年制の導入や学部外国語科目の大学院生受講を求めていく提案があり、それを推進することが認められたが、それらについて現実的な条件等を考えながら推進していく。	
	達成指標	具体的な提案内容について、その実現に向けた議論を開始する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	C
		理由	年度目標として当初に掲げた修士1年制の導入や学部外国語科目の大学院生受講については、全く手が付けられなかったため。
		改善策	現在、新型コロナウイルス感染症の対策等で手一杯であるが、状況が改善した後に、改めて議論を始めたい。
質保証委員会による点検・評価			
所見	コロナ禍で学部側との協議が進まなかったことは致し方ない面もある。新年度早々に議論できることを整理しておくことが望ましい。		
改善のための提言	学部生による研究科開講科目履修時の単位認定方法の見直しなど修士1年制導入に向けて必要な措置を取る。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
4	中期目標	①修士論文やリサーチペーパーの研究を進めていく上で必要な基本的な知識・概念・方法論を身につけていない学生を対象とするリメディアル教育方法の策定を行う。 ②修士課程1年次必修科目「国際文化研究」ならびに2年次必修科目「国際文化共同研究」の効果的な実施をさらに促進する。	
	年度目標	①基本的な知識・概念・方法論を身につけてもらう足がかりとして、本研究科の3研究領域での基本的な知識・概念・方法論の洗い出しを行う。 ②必修科目の担当者に必修科目がより効果的に実施されるための問題点等の洗い出しを行う。	
	達成指標	①学生に足りない知識を補ってもらうべく、各科目担当者による知識・概念・方法論を身につけるための基礎的な文献リストを年度内に作成する。 ②必修科目の担当者から問題点について、執行部がヒアリングを行い、より効果的な実施を目指すべく、年度内に教授会で情報を共有する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	B
		理由	①については3研究領域のコミュニケーションも本年度は密にはとれず、洗い出しを行うことはできなかった。②については、春学期と秋学期の間に文書を通じた問題点の洗い出し等を行い、それなりに効果的には実施されていた。以上の点を総合して、目標の達成が不十分であったと判断しBとした。
		改善策	現在、新型コロナウイルス感染症の対策等で手一杯であるが、状況が改善した後に、議論を始めたい。具体的には、春学期と秋学の必修科目の担当者間での情報共有、問題点の洗い出し等から始めていきたい。
質保証委員会による点検・評価			

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		所見	①については、M1 の必修科目において、リサーチ・デザインや研究のための基礎的な方法論を学んでいるが、3 研究領域における基礎的な文献リストの作成が必要である。②については、すでに実施されている必修科目の担当者間での引継ぎの一層の充実が必要。
		改善のための提言	基礎文献リストの作成、必修科目の担当者間での問題点の洗い出しと研究科内での情報共有を。
No	評価基準		教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標		①リサーチ・ペーパーの内容をより明確化し、リサーチ・ペーパーの教育効果の実質化を図る。 ②研究の主たる対象の調査や分析において必要な外国語（母語以外）の運用能力の育成を図る。
	年度目標		①リサーチペーパーを選択した学生の追跡調査を行う。 ②留学生については、調査・分析に苦がなく、発表が不自然にならないレベルの日本語能力が身につくようにする。 ③日本人学生については、基盤学部の外国語アプリケーション科目の履修に向けた検討を継続して行う。
	達成指標		①リサーチペーパーの教育効果を知るために、選択した学生と指導教員双方に、年度内にヒアリングを行う。 ②留学生については、発表会等で指導教員以外の教員と日本語能力について情報共有を行い、年度目標に達するのに必要な指導・助言を与える。 ③日本人学生については、基盤学部執行部と連携を密にとり、年度内に目標の実現について何らかの結論を出す。
	教授会執行部による点検・評価		
	自己評価		B
	理由		①については、該当する学生は9月修了の1名のみであり、ヒアリングのための会合という形ではなかったが、連携を密にとり、修了させることができた。しかし、それが精一杯のところ、教育効果についてのヒアリングには、とても至らなかった。②については、個々の指導教員を通じてではあるが、必要な指導・助言は行われたと考えている。③については、本年度、全く手が付けられない状態であった。以上がBとした理由。
	改善策		①については、該当する学生がいた場合には、ヒアリングを行い、教育効果について検証したい。②については、現状の指導を今後も続行していきたい。③については、コロナウイルス感染症の状況が改善したおり、改めて検討に踏み出したい。
	質保証委員会による点検・評価		
	所見		①～③に関する執行部の改善案を21年度、しかるべき委員会においてすみやかに検討することが望ましい。
	改善のための提言		②については、個々の留学生の日本語能力をよく知る日本語論文演習科目の教員の評価やアドバイスを指導にもっと生かせないだろうか。
No	評価基準		学生の受け入れ
6	中期目標		①基盤学部である国際文化学部からの進学者の増加を図る。 ②博士課程への進学者の増加を図る。
	年度目標		①研究科側からの情報提供をしっかりと行い、研究科の魅力をしっかりとアピールするべく、進学相談会の在り方等を変える。 ②博士課程への進学者の増加を図るべく、進学相談会の見直しを図る。
	達成指標		①進学相談会の回数を増やすことを考えたり、内容に差異化を図る。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		②進学相談会の中で、博士課程進学者に焦点を当てた部分を設け、本研究科の魅力を伝える。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	B
	理由	本年度は、進学相談会そのものが実施されず、①、②とも全く達成できなかった。しかしながら、Cとしなかったのは、『大学院要項』、『大学院案内』などの印刷物において、記述を見直し、研究科の特徴を反映した記述になっており、この点で少々の前進があったと考えられるため。
	改善策	進学相談会の開催自体が可能になることがまず必要である。その上で、本年度の目標の2点について、改めて実現の機会を探りたい。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	21年度の少なくとも春学期についてはコンテンツ配信を前提に準備をすべきかと思う。
	改善のための提言	博士課程に特化したコンテンツも用意する。
No	評価基準	教員・教員組織
7	中期目標	大学院を担当している教員の退任にあたっては、専任教員の新規採用を行う基盤学部の国際文化学部に変更を申し入れ、国際文化研究科側のニーズが反映された採用を図る。
	年度目標	後任の人事について、大学院として要望をはっきり示し、それが反映された採用の実現を図る。
	達成指標	教授会で議論の上、人事に関する申し入れ書として基盤学部に申し入れを行う。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	4月に新執行部が指導する以前から旧執行部と連絡を密にとったことで、後任の人事について、大学院として要望をはっきり示し、それが反映された採用の実現がなされているため。
	改善策	今年度研究科教員が2名退職したため、来年度に関しても人事案件が生じるが、今年度と同様、しっかりと要望をしめし、コミュニケーションを図り、よりよい教員・教員組織の充実を図りたい。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	研究科が必要とする人材の補充を引き続き柔軟に、そして円滑に行っていくことが望ましい。
	改善のための提言	執行部と将来構想委員会が中心となり、研究科の在り方と補充人事について検討する。
No	評価基準	学生支援
8	中期目標	外国人留学生に対する修学支援をさらに推進する。
	年度目標	主に修士課程の留学生に対して、既存の日本語支援体制、チューター制度などの効果の検証を行う。
	達成指標	執行部が年度を通じて留学生、日本語指導科目担当等教員、日本語チューターなどに対してヒアリングを行い、それを教授会で情報共有する。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
理由	年2回の発表会、基盤学部との国際文化情報学会での発表を重要視しているため、その前後にかなりチューター制度の活用があったため。実際、研究科長会議においても、本研究	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。



			科の外国人留学生のチューター利用が、回数にしても一番多いことが報告されている。しかしながら、教員、チューターに対してのヒアリングは行われていない状況。	
		改善策	チューター制度については、このような良好な活用実態を続けていき、さらにその上、可能であれば既存の日本語指導科目等教員について、ヒアリングを企画し、より一層の支援を推進したい。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	「国際文化研究日本語論文演習」科目の開設曜日の改善や「日本語論文演習C」(M2 春学期)の開設など、一連の改善努力が実りつつあるようである。	
		改善のための提言	日本語論文指導科目の担当教員、チューターへのヒアリングを是非実現してほしい。	
No	評価基準	社会連携・社会貢献		
9	中期目標	国際文化研究科の理念・目的に沿った社会貢献・社会連携の実施に向けた取り組みを図る。		
	年度目標	本研究科の理念・目的に沿った一般公開のFICオープンセミナーの実施を企画する。		
	達成指標	一般公開のFICオープンセミナーを最低1回開催する。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	Zoomを用いたリアルタイム・オンライン開催ではあったが、2回とも実施でき、それなりの成果を上げたと考えられるため。わずかながら研究科の外部からの参加もあり、現在の研究科の置かれている状況からは、社会貢献の観点からも評価できると思われるため。	
		改善策	一般公開のFICオープンセミナーを最低1回開催することを、今後も継続して続けていきたい。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	継続こそ大事だと思う。	
		改善のための提言	開催の案内を発表者の所属する学会などでもアナウンスするなどの努力をする。	
<p><b>【重点目標】</b> 本年度は理念・目的について重点目標とする。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>重点目標について研究科教授会などで議論し、可能な限り教授会内で情報共有する。</li> <li>一読しただけでは晦渋に思ってしまうHPでの本研究科の「見え方」について、改善を図るなどして、理念・目的の可視化を図る。</li> </ul> <p><b>【年度目標達成状況総括】</b> 2020年度は新型コロナウイルス感染症への対応に終始し、当初期待していた年度目標が達成できなかった。したがって、上記のような報告となった。しかしながら、そのような状況下において、以下の点は評価できる点である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>年度当初、すぐに研究科の教育内容について、音声付きパワーポイントのプレゼンテーションの公開ができたこと。</li> <li>通信環境などの整備等、紆余曲折はあったが、曲がりなりにもオンライン授業に対応できたこと。</li> </ul> <p>その一方で、以下の点については、来年度以降の課題である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>修士1年制の導入、外国語科目の大学院生受講など、カリキュラム面での改革に着手できなかった点。</li> <li>授業のオンライン化への対応等に注力しすぎて、研究科構成員同士のコミュニケーションが図れなかった点。</li> <li>進学相談会等が開催できなかったこともあり、進学者増加への試みに対応できなかった点。</li> </ul>				

### 【2020年度目標の達成状況に関する大学評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

国際文化研究科では、2020年度は新型コロナウイルス感染症への対応に重点を置いたため、年度目標の達成状況については9項目中2項目の目標を十分達成した自己評価に留まった。とは言うものの、2020年度重点目標として掲げた「理念・目的」については、国際文化研究科が目指すマルチカルチュラルな人材、インターカルチュラルに活躍する高度職業人及び研究者の具体的な人物像の実例を教員紹介冊子で情報共有したことは評価に値する。「教育課程・教育内容」に関連し、年度開始直後に教育内容について音声付きパワーポイントでオンライン配信し周知できたこと、通信環境の整備等を行いオンライン授業に対応できたことは柔軟な対応と言える。ただ、「教育課程・教育内容」の年度目標であった、修士1年制の導入や学部外国語科目の大学院生受講については進展が見られなかったが、今後の対応に期待したい。「社会貢献・社会連携」に関連し、一般公開のFICオープンセミナーをリアルタイム・オンライン形式で2回実施できたことは評価に値する。

#### IV 2021年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	人材育成とインターカルチュラルに活躍する高度職業人及び研究者の養成について、具体的な像ならびに養成の方法に関する議論を行う。
	年度目標	研究科教授会などで、どのような人物を理想とするか、どのようにすればそのような人物が養成できるか、意見を交換し、情報を共有する。
	達成指標	2020年度に教員紹介冊子にて新たに加えた、「私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物」について、各教員が簡単に紹介する機会をなんらかのかたちで設ける。
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	教員の教育能力の向上の取り組みの一環として、教員の研究活動の促進を図る。
	年度目標	基盤学部と共に実施する国際文化情報学会の行事であるFICオープンセミナーというかたちで、研究科所属の専任教員の研究発表会を複数回開催する。
	達成指標	FICオープンセミナーを最低2回開催する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	学生のニーズに即した学部・大学院の相互連携を、基盤学部である国際文化学部と協力しながら推進する。
	年度目標	2019年度に国際文化研究科における修士1年制の導入や学部外国語科目の大学院生受講を求めていく提案があり、それを推進することが認められたが、それらについて現実的な条件等を考えながら推進していく。
	達成指標	研究科将来構想委員会や研究科教授会で必要な議論を行い、年後目標を達成すべく、改革へ道筋を付ける。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	①修士論文やリサーチペーパーの研究を進めていく上で必要な基本的な知識・概念・方法論を身につけていない学生を対象とするリメディアル教育方法の策定を行う。 ②修士課程1年次必修科目「国際文化研究」ならびに2年次必修科目「国際文化共同研究」の効果的な実施をさらに促進する。
	年度目標	①基本的な知識・概念・方法論を身につけてもらう足がかりとして、本研究科の3研究領域での基本的な知識・概念・方法論の洗い出しを行う。 ②これらの必修科目について、どのように実際に実施されているのか、研究科としてしっかり把握し、各期ごとの移行が円滑に行われるよう努める。
	達成指標	①学生に足りない知識を補ってもらうべく、各科目担当者による知識・概念・方法論を身につけるための基礎的な文献リストを年度内に作成する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		②これらの必修科目について、それぞれの科目の担当者は各学期末に報告書を作成し、次期の担当者との引き継ぎや、研究科としての学生の情報の把握の一助とする。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	①リサーチ・ペーパーの内容をより明確化し、リサーチ・ペーパーの教育効果の実質化を図る。 ②研究の主たる対象の調査や分析において必要な外国語（母語以外）の運用能力の育成を図る。
	年度目標	①リサーチペーパーを選択した学生の追跡調査を行う。 ②留学生については、調査・分析に苦がなく、発表が不自然にならないレベルの日本語能力が身につくようにする。 ③日本人学生については、基盤学部の外国語アプリケーション科目の履修に向けた検討を継続して行う。
	達成指標	①リサーチペーパーを選択した学生がいれば、学生と教員から意見を聞く。 ②留学生については、発表会等で指導教員以外の教員と日本語能力について情報共有を行い、研究のために必要な指導・助言を与える。 ③日本人学生には、「Oral Presentation」、「Thesis Writing」の積極的な履修を勧奨すると同時に、基盤学部の外国語アプリケーション科目の履修に向けた検討に着手する。
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	①基盤学部である国際文化学部からの進学者の増加を図る。 ②博士課程への進学者の増加を図る。
	年度目標	①基盤学部生に研究科の授業の魅力を伝えるべく、必要な情報提供を行う。 ②博士課程への進学者の増加を図るべく、必要な情報提供を行う。
	達成指標	①学部生の大学院科目履修を勧奨することで、より多くの学部生に大学院教育を体験してもらおう。 ②新型コロナウイルス感染症により、本年度中止になった進学相談会の代替となる広報活動をしつかりと行い、博士課程進学につなげるよう注力する。
No	評価基準	教員・教員組織
7	中期目標	大学院を担当している教員の退任にあたっては、専任教員の新規採用を行う基盤学部の国際文化学部に要望を申し入れ、国際文化研究科側のニーズが反映された採用を図る。
	年度目標	後任の人事について、大学院として要望をはっきり示し、それが反映された採用の実現を図る。
	達成指標	将来構想委員会や教授会で議論の上、人事に関する申し入れ書として基盤学部に申し入れを行う。
No	評価基準	学生支援
8	中期目標	①新型コロナウイルス感染症により、学生の研究が支障をきたすことなく、研究を継続できるよう支援し、環境を整える。 ②外国人留学生に対する修学支援をさらに推進する。
	年度目標	①新型コロナウイルス感染症により、学生の研究が支障なく継続できるよう支援し、環境を整える。 ②主に修士課程の留学生に対して、既存の日本語支援体制、チューター制度などの効果の検証を行う。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	達成指標	①執行部や各教員が学生に対して、メール等で積極的に学習環境等のヒアリングを実施し、学生の様子の把握に努める。「特色ある教育研究プログラム補助」の有効活用等を通じて、研究環境の整備を行う。 ②執行部が年度を通じて留学生に対してヒアリング等を行い、それを教授会で情報共有する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
9	中期目標	国際文化研究科の理念・目的に沿った社会貢献・社会連携の実施に向けた取り組みを図る。
	年度目標	本研究科の理念・目的に沿った一般公開のFICオープンセミナーの実施を企画する。
	達成指標	本研究科の理念・目的に沿った一般公開のFICオープンセミナーの実施を企画する。
<p><b>【重点目標】</b> 本年度は、学生支援を重点目標とする。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・執行部や各教員が学生に対して、メール等で研究環境を確認したり、意見等をヒアリングすることにより、学生の様子の把握に努める。そのためにはとにかく、コミュニケーションを密にとる。</li> <li>・新型コロナウイルス感染禍においても、学生の研究に支障が出ないように、環境等の整備に最大限の留意を払う。</li> </ul>		

### 【2021年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

国際文化研究科では、2021年度中期目標・年度目標ともに現状分析を踏まえており、適切かつ具体的に設定されている。2021年度重点目標として掲げている「学生支援」の強化は、現状を考慮した適切な年度目標であり、目標達成のための施策も評価できる。「教育課程・教育内容」に関連し、2019年度に提案された修士1年制の導入や学部外国語科目の大学院生受講について2021年度には筋道が立つ設計が期待される。

「学生の受け入れ」に関連し、新型コロナウイルス感染症の影響により中止になった進学相談会の代替となる広報活動について更なる工夫を期待したい。一般公開のFICオープンセミナーを複数回開催する年度目標は、教員の教育・研究能力の向上を促進する「内部質保証」と一般公開による「社会貢献・社会連携」に繋がるので、その実行が期待される。

### 【大学評価総評】

国際文化研究科は、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響への対応に重点を置きながら研究科運営が行われた。「教育課程・教育内容」については、教育課程の編成・実施方針に基づき、修士・博士後期課程共にコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせており、教育課程が着実に実施されていると評価できる。学生の履修指導に関しては、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、従来の対面方式からオンラインによる配信形式への変更の上、執行部でこまめに学習状況に対応し、メール等で相談等を受理、必要な場合には学生とオンライン面談等を行って対処したことは評価に値する。

「教員・教員組織」、「社会貢献・社会連携」に関連し、教員の研究発表会の場として一般公開のFICオープンセミナーをリアルタイム・オンラインで実施し、教員の教育・研究能力の向上と社会貢献活動に繋がっている。また、研究科独自のFD活動として優れた取り組みである後シラバスの研究科教授会での共有・議論は将来のカリキュラム改革等に役立つプロセスと評価できる。法政国際文化倫理委員会の新規設立は、教育内容および研究活動の充実化・内実化をもたらす効果が期待される。問題点・課題として挙げられている、研究科（専攻）単位での学生の就職・進学状況に対する情報収集不足については2021年度に改善を期待したい。

大半の教員が研究科を含め3つの教学組織に所属していることから、研究科専任教員の研究やFD活動の活発化が容易でない側面があるが、事務作業の更なる軽減や効率化を図ることで対処していくことが期待される。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。